

# 大正島

# 今昔帖

歴史の巻



## 大正島今昔帖とは？

大正区には、川と海に囲まれた特徴的な風景や「大大阪」時代を彷彿とさせる近代史の面影などの多彩な魅力があります。

今般、区内でボランティアガイドを行う「大正区の歴史を語る会」のご協力を得て、これまで取り上げられることが少なかった大正区の隠れた魅力を掘り起こし、「歴史」「水辺」「橋」「沖縄」の4つをテーマに、今昔物語としてマップにまとめました。

あまりにも多くの魅力が発掘されたため、全てを掲載することができませんでしたが、区内では、さまざまなテーマでツアーガイドが行われていますので、ぜひ解説をお聞きいただきながら昔に想いをはせて、より深く大正区をお楽しみいただけたら幸いです。

大正区内のまちあるきガイドや  
ツアーの問い合わせはこちら

大阪市大正区役所市民協働課  
☎06-4394-9743



### JR・地下鉄 大正駅へは

- 大阪からJR大阪環状線で11分
- 天王寺からJR大阪環状線で8分
- ユニバーサルシティからJRで13分(西九条乗換)
- 心斎橋から地下鉄長堀鶴見緑地線で6分

発行：大阪市大正区

協力：大正区の歴史を語る会

編集：一般財団法人大阪市コミュニティ協会

イラスト：能勢将人 マツトユキコ

※このマップは、大阪市区政推進基金(みなさまからの寄付)を活用して作成しています

## 「勘助島物語」

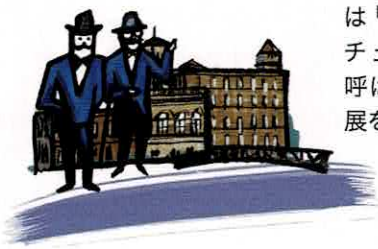
大正区の新田開発は、江戸時代初期に、難波八十島のうちの姫島が開拓されたことから始まりました。これが現在の三軒家周辺です。開拓者の名は中村勘助。別名を木津勘助といい、島の北岸にあった軍船係船所の建設に従事し、その後、沿岸に風波を防ぐための堤防を築き、船着き場を整備しました。その功を豊臣家に認められ、開発した土地を「勘助島」と名付けることを許されました。一方、寛永の大飢饉では、幕府の米蔵を無断で開け放ち、飢饉に苦しむ人々に米を施したことで、島流し（一説には死罪）になり、皆に惜しまれながら、その生涯を終えました。



## 「渋沢栄一と三軒家紡績」

明治16年(1883年)、大正区にレンガ造のモダンな紡績工場が誕生しました。創業者の渋沢栄一は、海外からの綿糸輸入額が巨額であることに着目し、国益の観点から大規模な紡績事業を興すことが重要であると考え、藤田伝三郎らと共に、当時の大阪府西成郡三軒家村に大規模な紡績工場を設立しました。地名にちなんで、三軒家紡績(正式名は大阪紡績会社)と呼ばれたこの工場は、大正区の近代工業が飛躍的に発展するきっかけとなり、大阪の紡績業を日本一に押し上げる原動力となりました。明治20年代には、当地を中心に数多くの紡績・繊維会社ができ、日清戦争から

日露戦争時代にかけて大阪は「東洋のマンチェスター」と呼ばれるほど発展をとげました。



## 「日本初! 市電が走るアーチ橋 ～大正橋～」

大正橋は、大正4年(1915年)に市電の開通とともに市街地との幹線道路として架けられたアーチ橋です。長さ約91m、幅員は市電の軌道敷も含めて約22mあり、当時木津川を多く航行していた石炭運搬船の妨げにならぬよう橋脚をもたない橋として設計されました。その後、都市計画拡張整備に伴い、初代大正橋は撤去され、昭和49年(1974年)に現在の2代目大正橋に架け替えられました。橋の欄干にはベートーヴェンの交響曲第9番「歓喜の歌」の楽譜、歩道にはメトロノーム、路面にはピアノの鍵盤がデザインされています。

ちなみに、「大正区」の区名は、この橋にちなんでつけられています。



## 「司馬遼太郎と大正区」

歴史小説で有名な司馬遼太郎は、大正区から大津橋を渡ったあたりの浪速区西神田町(現在の塩草)で生まれました。実在した幕末の俠客・小林佐兵衛の激しく雄々しい生き方を描いた作品「俄一浪華遊俠伝一」(1966年講談社文庫)の中では、大正区尻無川の風景が著されています。物語は、一家を養うため、困難に直面しながらも立ち上がって金を稼ぎ、最後には日本一の俠客に成り上がるというものです。作品の中では、川に投げ込まれ船番所(現在の大正橋公園付近)まで流れ着く場面や、尻無川の土手で長州の志士・桂小五郎を救う場面などが描かれています。



# 大正島今昔帖

## ～歴の巻～とは？

江戸時代初期から始まった新田開発で開拓された大正区の歴史を堪能できるまちあるきコース。三軒家エリアを中心とした大正区北側をメインとしています。

歩行距離：約4.2km

所要時間  
80分

地図のみかた

**S** スタート地点  
JR「大正駅」

**G** ゴール地点  
大正駅

(JR環状線・地下鉄長堀鶴見緑地線)

**24h** コンビニエンスストア  トイレ

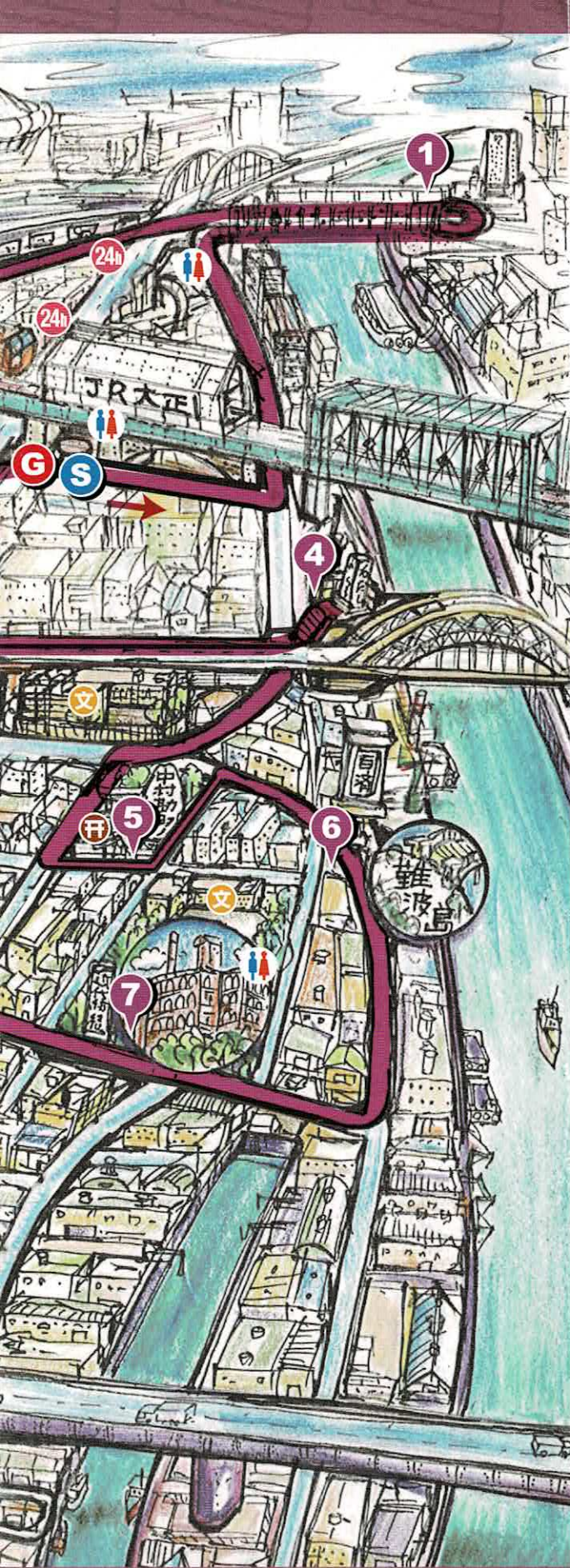
### 1 大地震両川口津浪記石碑と大正橋

安政元年(1854年)11月4日・5日に連続して発生した地震(世にいう「安政の大地震」)と、それに伴う津波による惨状を記録し後世に語り継ぐことを目的として建立されました。碑文の最後に「願わくば心あらん人、年々文字よみ安きよう墨を入たまふべし」とあり、墨を入れ続けることで、次の世代に伝わるよう願いが込められており、現在においても、毎年地蔵盆にあわせて石碑を洗い、刻まれた文字に墨を入れるのが年中行事となっています。この碑が立つ大正橋には、欄干を五線譜に見立て、ベートーヴェンの交響曲第9番「歓喜の歌」の楽譜が刻まれており、歩道にはメトロノーム、路面にはピアノの鍵盤など音楽をテーマにデザインされています。ちなみに、「大正区」の区名は、この橋にちなんでつけられています。(橋長80m・幅41m)(関連：裏面「日本初!市電が走るアーチ橋～大正橋～」)

### 2 御船蔵跡パネル(岩崎橋公園内)

江戸時代、岩崎橋公園付近には幕府の官船等を納める施設「御船蔵」がありました。当地の御船蔵が蔵した官船名は明らかではありませんが、当時の幕府の川御座船(天皇・公家・将軍・大名など貴人が乗るための豪華な船のこと)には紀伊国丸や土佐丸等の名前が見られます。漆塗りの屋形を持ち、金銅の金具をつけて豪華な装飾を施され、櫓と棹で航行する川船だったそうです。ちなみに、朝鮮通信使が大阪市中に向かう前に、大船を停泊させておく場所としても利用したそうです。(関連：水の巻「尻無川～唐人滯～」)





### 3 尻無川

江戸時代、尻無川は現在の京セラドーム大阪の場所を通り、西区江之子島まで続いていました。当時兩岸の堤防は、樋が立ち並ぶ紅葉の名所となっており、川では釣りを楽しむなど遊興の地として有名でした。現在は、運搬船等の水路として利用されていますが、近年水質が改善され魚が戻りつつあり、冬季にはユリカモメを見ることができます。

(関連：水の巻「甚兵衛の小屋」)

### 4 勘助島渡しの碑

江戸時代、このあたりに木津川を挟んで難波村（現浪速区）と「勘助島」を結ぶ渡し場がありました。碑の正面には、「わたし勘助島」とあり、側面には「すくちかみち なんば 今宮 天王寺 住吉 あ三田池 道頓堀」と表記されていることから、当時の道標であると考えられています。

### 5 上八坂神社と中村勘助の碑

上八坂神社は、正保4年（1647年）、三軒家の開拓者「中村勘助（木津勘助）」が京都・八坂神社の分霊を勧請し、スサノオノミコトを祭ったのが起源であるといわれています。境内には大阪の水利のために尽くした中村勘助の功績を讃えた碑が残されています。（関連：裏面「勘助島物語」）

### 6 難波島パネルと百済橋跡

江戸時代、このあたりは「難波島」と呼ばれ、加賀（現石川県）国等の船宿が見られるなど木津川交通の要衝として発展しました。難波島西側を流れる三軒家川（木津川の支流）では、「勘助島」に渡る百済橋が架けられており、この付近一帯は水路と川に囲まれた“洲”であったことが観えます。昭和33年（1958年）、高潮対策のため三軒家川が一部埋め立てられ、百済橋は廃橋になりましたが、現在においても、橋の外郭がそのまま残されています。

### 7 近代紡績工業発祥の地

明治16年（1883年）、このあたりに「大阪紡績会社（現：東洋紡）」が設立され、大正区の近代工業の飛躍的な発展や、大阪の紡績業を日本一に押し上げる原動力となりました。モダンなレンガ造りの建物でしたが、昭和20年（1945年）3月の大空襲で焼失し、その後三軒家東小学校と三軒家公園に生まれ変わりました。昭和35年（1960年）、工場があった公園の西隅に近代紡績工業発祥の地として記念碑が建てられ、盛時をしのばせています。（関連：裏面「渋沢栄一と三軒家紡績」）